

二世界解釈と二側面解釈

——そもそも何が問題だったのか？——

千葉 清史

超越論的観念論はカント理論哲学全体の基盤をなす根本想定である。それはさらに、自由の問題を通じて実践哲学の問題圏にも関わる。超越論的観念論の理解は、カント哲学の全体像の把握に影響を及ぼさずにはおかない。

とはいえ、超越論的観念論が実のところどのようなことを主張するものなのか、ということについては古くから論争が絶えず、その状況は現在においても変わっていない。

超越論的観念論についての解釈論争として現在代表的なもの、いわゆる「二世界解釈 [two-world interpretation]」と「二側面解釈 [two-aspect interpretation]」を巡るものである。

これらは、カント批判哲学における「現象」と「物自体」の概念についてのものである。二世界解釈は、「現象」と

「物自体」を、二種類の異なる存在者を表すものとし、それに対して二側面解釈はそれらを、一つの同じものについての二つの側面であると理解する。

今日ではさらに、後者に関して「形而上学的」／「方法的」ヴァリアントが区別される。また、これらのいずれにも収まらないと自称する諸「代案」も提案されるに至り、論争はまさに混迷の様を呈している。それぞれの陣営の主張の内実、とりわけ、その対抗諸解釈に対する本質的相違点を把握することが困難になっている。自説に反する諸立場を戯画化して提示する傾向がそれに拍車をかけ、そもそもこの論争において何が問題になっているのか、ということすら不明瞭になってしまっている。

こうした現状に対し、私は本論文で、二世界／二側面解釈を巡る今日の論争についての明瞭な見取り図を提示したいと思う。とはいえ本論文が目指すのは、単なる解釈諸学説紹介ではない^二。私は、当該の論争の根底にあると思われる対立点をクローズアップすることによって、論争状況の大胆な整理を行う。その対立点とは、私が以下で「実在論／観念論的解釈」と呼ぶところのものである。これにより、二世界／二側面解釈を巡る現在の論争についての見通しの良い理解が得られるとともに、この論争をカント解釈そのものにとつてより実り豊かなものとする道も拓かれる、と私は論じようと思う。

この主題を私はすでに Chiba 2012a (*Kants Ontologie der raumzeitlichen Wirklichkeit*) —— 以下、「KORW」と略記する —— 第三章で詳細に論じた。(そこでは「実在論的／観念論的解釈」ではなく、「実在論的／反実在論的解釈」という名称が用いられたのだが。) にもかかわらず、この主題に関する考察を私が新たに日本語で公開することにしたのには理由がある。KORW 当該箇所の論述は、二世界／二側面解釈を巡る論争がある程度知られており、さらに、少なくとも、その

論争の重要性については同意が存する、との想定のもとでなされていた。しかしながら、日本では、この論争の現状のみならず、そもそもそれが超越論的観念論理解にとつてどのような意味で重要であるのか、ということすらあまり知られていないようである^三。こうした状況に鑑みれば、二世界／二側面解釈を巡る論争においてそもそも何が問題になってきたのか、ということを明らかにすることは、特に日本におけるカント研究にとつて意義のあることであるように思われる。私は、この論争が単に、カントが超越論的観念論を表現する際の言い回しについての——この論争の当事者たらんとする者以外は無視できもするような——皮相な問題に留まるのではなく、カント解釈全体の理解を左右するような根本的な問題に関わるものなのだ、ということを示したい。

本論文のような研究は、特に日本では、「解釈の解釈にすぎない」などと言われて蔑まれる傾向がある。しかしながら、世界で行われている解釈論争の現状を把握することには、単に自らの研究をアップ・トゥー・デートなものにするためには必要だ、ということ以上の重要性がある。「私

はカントのテキストそのものに即して解釈するのです」などと謳ったところで、今までの解釈論争における議論の蓄積について無知であるならば、すでに十分な論拠によって信憑性を失ってしまった見解や、あるいは現在の研究水準からすれば相互矛盾していることが明らかな諸見解の寄せ集めをナイーブにも「新解釈」として打ち出してしまふ、といったような啗うべきことにもなりかねないのだ。

KORW で私は、以下で「観念論的二世世界解釈」と呼ばれることになる立場を擁護した。しかし、私はこの論文で自身の超越論的観念論解釈を展開するつもりはない。(それに触れざるを得ない箇所もあるが、そのようなことは最小限に留める。) 私は党派色を極力排して、むしろ KORW において私が格闘していた問題圈そのものを明らかにすることに努める。今後の日本の超越論的観念論研究において、何か新しい議論、あるいは実り豊かな論争が行われることを期待するならば、まずはこうした地道な作業が不可欠であろう。

本論文は次の順で進む。初めの二節では、解釈論争における諸立場が生じてきた経緯を考慮しつつ、それらの内実を可能な限り明瞭化することを試みる。第一節では「二世

界解釈」・「二側面解釈」が、第二節では後者の「形而上学的」・「方法的」ヴァリアントならびにその他の解釈図式が扱われる。第三節では、「實在論的／観念論的解釈」の区別を用いて現在の解釈論争の状況を整理することを試みる。第四節では、このように整理された解釈論争がさらにどのように展開されるべきなのかについての私の示唆を提示する。

考察を始める前に訳語についての注意を挙げておきたい。「two-aspect interpretation」の標準的な日本語訳「二観点解釈」は、とりわけ形而上学的なそれに対して適切ではない(その理由は本論文十頁を参照)。そのため本論文では、形而上学的ヴァリアントにも等しく適用できるより中立的な表現として、「二側面解釈」という訳語を用いることにする。

一 「二世世界解釈」と「二側面解釈」

二世世界／二側面解釈について上で与えられたような規定は、両者の相違を形式的に表現することに関しては十分で

あるとはいえ、その実質を明らかにするには至っていない。そのためには、解釈史においてこの相違が自覚化されてきた経緯が顧慮されるべきである。

両者それぞれに分類されるような解釈的立場は以前にも存在したが、カント解釈史において両者の相違が重要なものとして明瞭に自覚されるようになったのは、一九六〇年代後半、とりわけ英語圏のカント解釈においてのことである。この相違はとりわけ、二側面解釈——と将来呼ばれることになる立場——の提唱者が、それ以前に典型的であったと彼らが考える観念論的解釈、とりわけその洗練形としての現象主義的解釈に対して自説を区別しようとする過程において表面化してきた。ここで言う「観念論」とは、経験的对象——以下では特に空間的对象を例にとろう——を、我々の認識・表象に依存して存在するものとみなす見解の総称である。「観念論的解釈」ならびにそれに対する「美在論的解釈」の内実については、第三章でより詳細に規定することにする。）

観念論的解釈の素朴なヴァージョンは、空間的对象を、我々の内なる表象（ないしその集積）と等置する。『純粹理

性批判』にはこうした素朴な見解を支持するテクスト的証拠すら見出されるものの、このヴァージョンは、表象作用とその対象の区別、という、現象学的に全く正当であり、またカント自身も A189f/B214f 等で強調している区別を認めることができない、という致命的な欠陥をもつ。この自覚のもとでより洗練されたヴァージョンが、いわゆる「現象主義的解釈」である。これは、特に論理実証主義者（初期のカルナップ、エイヤー）らによって洗練された「現象主義」に範をとり、空間的对象を、我々の内なる表象——典型的には感覚——からの論理的構成物とする。

現象主義については、特にカント研究においては甚だしい誤解（あるいは戯画化）が横行しているので、ここで手短な説明を与えておくことには意味があるだろう（詳細は例えば Aver 1941 第五章を参照）。論理的構成とは、空間的对象を単純に知覚の束に還元することではない。それはむしろ、空間的对象についての言明を、表象についての言明の束に還元することである。例えば、「机の上にリングがある」という言明は、「状況 c （例えば場所 p からその机を見た場合）でならば感覚 s が得られるだろう」「状況 c でな

らば感覚与件⁵が得られるだろう」・・・等々の、(単に現
実的知覚にとどまらない) 可能的知覚についての言明の集積
へと分析される(最終的には状況についても感覚与件文による
還元がなされることになる)。机の上のリンゴ、という空間
的な物は、このような諸知覚において、対象として共通に
思念されるところのものとして理解される。こうして、知
覚とその対象の区別を——現象学における「ノエシス」と
「ノエマ」の区別と類比的な仕方——説明することが可
能となる。⁽⁴⁾ 現象主義はさらに、対象の論理的構成の基盤と
して、現実的知覚のみならず反事実的状况における可能的
知覚をも含めるので、「実際に知覚されることなしには空
間的事物は存在しない」といった馬鹿げた帰結を持つこと
もない。

さて、現象主義がいかに洗練された立場であるとしても、
それは、空間的事物が我々の認識・表象に依存して存在す
る、という常識——我々の前理論的な世界理解——に著し
く反する観念論的形而上学を主張するものだ、という点は
動かない。そして、こうした観念論的形而上学は、ラッセル、
ムーア以来の反観念論的傾向を持つ英米圏の哲学的伝

統においてはとりわけ嫌悪の対象であった。⁽⁵⁾ (この点で、二
世界／二側面解釈の論争を表舞台にまで引き上げた英語圏の解
釈論争は、ドイツ観念論以来ゲロルト・プラウスにまで至るド
イツ的な解釈傾向とは全く異なる、ということには注目に値する。)
さらに、その洗練形であるはずの現象主義に関しても、そ
れは一九六〇年代においてすでに、失敗した哲学的立場の
典型例とみなされていた。そうした状況では、カント哲学
にどんな形であれ「現象主義」というレッテルを張られる
ような見解を帰する解釈は、カント哲学の哲学的意義を貶
めるものである、と考えられる土壌ができていった。⁽⁶⁾

こうした土壌から、カント哲学をより常識的な実在論に
近い立場として理解しようとする試みが現れてきた。それ
によれば、我々が空間的対象として認識する当の物は、我
々が表象の総合、すなわち認識を通じて構成するようなも
のではなく、我々の認識から独立に存在するものである。
もっとも、カント批判哲学においては、そうした物が我々
に時空的に現象してくるあり方は我々の感性形式に依存す
る、とされることになる。こうして、現象と物自体のカン
ト的区別は、認識依存的な物と認識独立的な物の区別とし

てではなく、認識から独立に存在する一つの物に関する、それが感性形式を通じて我々に時空的に現象してくる側面と、それがそれ自体において持つ側面との区別として理解されることになる。

こうした解釈を提唱する解釈者らは、次第に、自らの立場を「二側面解釈」と呼び、それに対して、観念論的解釈に典型的であるような立場を「二世界解釈」と呼んで区別するようになった。実際、観念論的解釈は、上で「二世界解釈」として紹介された立場に親和的である。というのも、カント哲学体系においてはいずれにせよ、我々の表象から独立にそれ自体で存在（し、触発を通じて我々の内に感覚を産出）するような「物自体」が少なくとも思考可能なものとして認められなければならないように思われるが、経験の対象が認識依存的に存在するものとみなされる限り、そうした「物自体」が経験の対象と同一のものとされることはできないからである。

（脇道にそれるが、ここで次のことに注意を促しておきたい。たいていの二世界解釈は物自体の存在主張を肯定するとはいえ、このことは、二世界解釈の定義的要件ではな

い。というのも、二世界／二側面解釈の対立は現象と物自体の概念についての——すなわち、それらによって理解されるべきものが二つの異なる存在者なのか、それとも同じ物の二側面なのかということに関する——ものだからである。従って、現象と物自体の二世界解釈的概念は受け入れた上で、そのような意味における物自体は存在しない、あるいは少なくとも、そうしたものの実在を積極的に主張することはできない、とする解釈（例えば Rescher 1972, 1981）もまた、二世界解釈の一種として理解されるべきである。）

さて、上述の歴史的経緯は、なぜ、「二世界解釈」という、それが表わすべき立場を表現するためにはいささか不適切な名称があえて選ばれたのか、という事情を説明する。こうした魅力に欠ける名称——それは、悪名高きプラトンの「二世界説」を強く連想させる——が、その提唱者によって考案されたとは考えにくい。それはむしろ、その批判者によって、まさにそれが指す解釈上の立場を批判するために編み出されたレッテルであったのだ。¹¹

とはいえ、「二世界解釈」という名称は解釈論争においてすでに定着してしまっているので、私は「二世界解釈」

という名称を今後も使い続けることにする。私がやみくもに新しい名称を提案しない理由は、そのことよってあたかもこれまでの論争とは別の主題が扱われるかのような誤解を避けるためである。私は、不適切な名称をあえて受け入れて、むしろ現在に至る解釈論争の内実を明らかにする、という実を取りたいと思う。

ここで、二世界／二側面解釈の区別に関する重要な注釈を付しておきたい。元々、二側面解釈は、我々が経験的に認識する個々の物が「現象」と「物自体」という二側面を持つ、という主張であった。この論点は、上述されたように、個々の対象が認識依存的に存在すると解されるか否か、というより根本的な論点に関連するものであり、二世界／二側面解釈の論争においては本質的な重要性を持つ。しかしながら、こうした元々の論点を忘却し、「二世界／二側面解釈」という単に言葉にのみ拘泥すれば、《現象界と叡知界は、一つの世界の二つの側面である》という解釈が二側面解釈のヴァリアントであるかのように誤解されもする。実際のところ、こうした立場は、偽装された二世界解釈ないし二側面解釈に他ならない、と主張し得るよい理由

がある。この話題について私は第三節で論じる。差し当たり、私の以下の論述において、二世界／二側面解釈はいずれも、個々の経験的对象に関わるものだ、ということを読者は念頭においていただきたい。

さて、二世界／二側面解釈のテクスト的証拠について言えば、まず、カントの言い回しのうちには、後者を支持するものが容易に見出される。その典型的なものは、《我々は、対象を、それがそれ自体であるように *wie sie an sich selbst sind* ではなく、それが我々に現象するようない方で *wie sie uns erscheinen* 認識するに過ぎない》といった表現である。(これは、Barker 1967 が (“language of appearances” に対して) “language of appearing” と呼んだところのものである。) ここでは明瞭な例を一つのみ挙げることにしよう…

「感性的直感の形式によつて」我々はしかしながら、客観を、それが我々(我々の諸感官)に現象しうるように認識するにすぎず、それがそれ自体であるかもしれないような仕方では認識するのではない。」(Prolegomena,

AA4, p.283)

さらに、「現象」と「物自体」は同じものについての二つの側面であることが、取り違えようのない明瞭さで表現されている箇所もある：

「とはいえ、十分注意されねばならないことが、やはりここにつねに保留されている。それは、我々が「現象」として認識するものと「ちょうど同じ対象 eben diesen Gegenstände を、物自体としてもまた、たとえそれを認識することはできないにしても、やはり少なくとも思考することはできないならならぬ、というところである。」(BXXXVII)

「しかしもし批判が、客観を、二重の意味に、すなわち現象として解するか、それとも物自体として解するか、という区別を教える点で誤っていなかったとすれば、すなわち、「…」因果性の法則が第一の意味における物にのみ、すなわち物が経験の対象である限りにおいてのみ適用され、まさに同じもの eben diesen

がしかしながら第二の意味に解される場合には因果性の法則に従わしめられないとすれば「…」(BXXXVIII)

これらの箇所を二世界解釈の枠組みで解釈することは極めて困難である。とりわけ後者の引用が関わる、カント自由論における行為主体の二面性の教説は、二世界的な解釈を全く受け付けない、と考えられても不思議はない。⁽¹⁹⁾

それに対し、二世界解釈を直接に支持するような表現は少なく、また二側面解釈についてのものほど明瞭でもない。⁽²⁰⁾とはいえ、二世界解釈が観念論的解釈に親和性が高いことを考えれば、観念論的解釈の証拠として典型的に用いられてきた次のタイプの表現も二世界解釈を間接的に支持するものとみなされ得る(しまた二世界解釈者によって実際そのように用いられてきた)。(a) 「現象」(ないし時空的対象)と「表象」を同一視するもの。(b) 「現象」は「私/我々(ないし表象、思想等々)の内にある」と表現するもの。——これらはよく知られているものなので、ここでその一々について紹介する必要はあるまい。

こうした言い回しを二側面解釈の枠組みで再解釈する試

みは多々行われており、それは一定の成功を上げて^{二二}もいる。従って、表面上のテクスト的証拠からすれば二側面解釈に分があるように見えるが、それで解決するほど解釈論争は単純なものではない。二側面解釈には、『純粹理性批判』の中心的主張との整合性を問う批判もなされ得るのだ。

典型的な批判の一つは、二側面解釈は現象と物自体との間に、物自体の認識不可能性からすれば認められ得ないような同型性・isomorphismを想定せざるを得ない、というものである。^{二二} というのも、二側面解釈によれば、我々がその現象的側面を認識する物はそれ自体のレベルでもある種の物、すなわち実体でなければならないように思われるが、そうであるならば、経験的認識を通じて複数の物が現象レベルで認識されるならば、このことから少なくともそれと同数の叡知の実体が存在することが確定できてしまうことになる。これは明らかに、物自体の不可知性に反する。(カントの物自体の不可知性テーゼは、そもそも物自体に対する多性のカテゴリーの適用可能性すら疑う徹底的なものである。)

さらに、二世界／二側面解釈の対立の根本にあつた存在論的相違、すなわち、觀念論的形而上学と、より常識に近

い実在論的見解との相違に注目すれば、二側面解釈に対するより実質的な批判も可能になってくる。これについて私は最終節で論じることしよう。

二一 「方法論的二側面解釈」の登場と、

その後の諸解釈図式の乱立

Allison 1983以来、二側面解釈の内部における形而上学的／方法論的ヴァリアントの区別がなされるようになってきた。とはいえ、この相違の実質を理解することは容易ではない。

形而上学的二側面解釈については比較的広範な合意があり、それは次のような主張として定式化される…「現象」と「物自体」の区別——より正確には、我々が経験的に認識する物の現象的側面と自体的側面の区別——は、二種類の性質ないし存在様相の間の区別である。これによれば、我々が経験的に認識する物に関して、一方では、時間・空間という直観形式を持つ人間的認識主観との関係においてのみ物に帰属する、主観依存的な性質・存在様相があり、

他方で、こうした主観的要件に依存しない、物がそれ自体において持つような性質・存在様相がある、ということになる。^(三三)

これに対して方法論的二側面解釈は、次のような主張として定式化されることが多い。現象的側面と自体的側面の区別は、物がもつ性質の間の区別ではなく、それを我々が考察する際の二通りの観点^(三四)ないし考察様式 *ways of considering* の間の区別である。(二)のことから、現在標準的であると思われる *"two-aspect interpretation"* の訳語「二観点解釈」は、形而上学的ヴァリアントに対しては不適切であることがわかる。)物を「現象として」考察する、とは、それを我々の感性との関係において考察することであり、物を「それ自体の観点で」考察する、とは、それを我々の直観形式を捨象した上で考察する、ということである。^(三五)

こうした定式はよくなされるものであるとはいえ、この定式それ自体に説明能力はほとんどない。とりわけそれは、方法論的二側面解釈が形而上学的なそれとどのような点で異なるのか、ということを全く明らかにしない。というのも、形而上学的二側面解釈もまた、「観点」のジャーゴン

を用いて全く同様に再定式することもできるからである。形而上学的二側面解釈によれば、「現象として」考察されるものは物の現象的||主観依存的な性質であり、また、「それ自体として」考察されるものは物がそれ自体で持つ性質であることになる。定式における「観点」ジャーゴンの使用だけでは、方法論的二側面解釈を形而上学的それと区別するために役に立たないのだ。^(三六)

実際のところ、方法論的二側面解釈が形而上学的なそれに対してどのような意味で代案になっているのかということとは、その提唱者たちの具体的な解釈を検討すればするほど分かりにくくなってくる。次節で私は、この困難が何に由来するのかを一般的に説明する議論を提示する。ここでは、解釈史の流れを理解するための最低限として、「方法論的二側面解釈」と称される立場についての大まかな性格付けを提示するに留めよう。

本質規定は困難であるとはいえ、「方法論的二側面解釈」と呼ばれる解釈に共通する要素を挙げることはできなくもない。まず、その典型例は、Allison 1983 (第二版、2004) である。今日「方法論的二側面解釈」を自認する解釈者は

例外なく、自らの解釈上の立場がアリソンのそれを基本的に継承するものであると表明している。⁽²⁶⁾ また、アリソンと同様、「現象主義的解釈」を否定する。

こうした表面的な点に加えてさらに、諸「方法論的二側面解釈」においては、それらを導く根本的動機に関する共通点も窺い知れる。それは、カント理論哲学から——常識に著しく乖離するという意味での——「形而上学」的要素を排する、というものである。⁽²⁷⁾ 方法論的二側面解釈者からすれば、形而上学的二側面解釈は觀念論的形而上学を排する点で前進があったとはいえず、まだ形而上学的要素を十分に廃棄しきれていないのだ。というのも後者によれば、經驗的对象は、我々に認識可能な現象的側面を持つ一方で、不可知な物自体の領域にもいわば片足を突っ込んでいる。ということにならざるを得ないからである。こうした不可知の存在様相の措定は、まさに悪しき「形而上学」に他ならないように思われる。二種類の存在様相から二通りの考察様式へと焦点を移す、という方法論的二側面解釈の戦略において期待されるのは、こうした「形而上学」的存在様相を設定することを避けることである。というのも、この

戦略においては、少なくとも經驗の対象（時空的事物）の分析に関しては、「物自体」——より正確には、物の自体的側面——すら、我々が經驗的に認識する物の、我々の感性的要件を捨象した上で考察された限りでのあり方ということになるからだ。ここでは、我々と対象の関わりについての認識論的・現象学的分析が問題となるだけで、不可知な自体的存在様相といったものの想定はなしで済ませられる、ように思われる。（実際はそううまくはいかない、と私は次節で論じることになるが。）

我々が經驗的に認識する個々の事物はそれ自体では認識不可能であり、その認識不可能なものが我々に時空的なものとして現象する、という形而上学的二側面解釈の根本説明図式は、カント解釈に内在的な理由からも否定されるべきである、とアリソンは主張する。というのも、この説明図式では、物の自体的側面こそが物の「本當の real」あり方であり、それに対して、現象的側面は、物が「単に、我々にとってそのように見えるにすぎない」というだけの、いわば仮象にすぎない、ということになるからである。しかしこれは、カントの「經驗的実在論」に反するもので

ある (cf. Allison 2004, p.46)。

方法的二側面解釈は、少なくとも彼ら自身の言い分によれば、物の「本当の」あり方といったものを想定しない。物の「自体的側面」と呼ばれるものすら、経験の対象の、直観的要件を捨象した観点から考察された限りでのあり方、ということにすぎないのだ。

さて、以上が方法的二側面解釈が意図することの大きな説明であるが、こうした批判に対して形而上学的二側面解釈の陣営が無策であったわけではない。特に、形而上学的二側面解釈の枠組みにおいて「現象」を仮象に貶めることを回避する説明を与えることに關しては、Allis 2004, 2007 以来、目覚ましい進歩が見られた。^(二九) 以下ではこれをさらに精緻化した Rosfeldt 2007 の説明を紹介する。

その根本的着想は、カント的「現象」を、色とのアナロジーによって解釈することである。その際用いられるのは、現代分析哲学においてしばしば援用される、色の傾向性分析である。^(三〇) これによれば、例えばある物が赤い、ということとは、その物が《適切な状況下で (例えば十分な光の下で) 見られるならばそれは我々に赤いものとして知覚される》

という傾向性 disposition を持つこととして説明される。こうした分析の眼目は、一方で色の主観依存性——知覚主観との関係なしに、色は存在しない——を維持しつつ、色の客観性を説明することができる、ということである。というのもそれによれば、物は単に色を持つように見える (が実際には色を持ってはいない) のではなく、色を上述のような傾向性として実際にもつのであり、さらにその傾向性は、物の認識独立的な性質 (例えば、物の表面の物理的狀態) に根差した客観的性質だ、とされるからである。こうした色の傾向性分析と類比的に、カントの意味における「現象」は次のように説明されることになる…

ある物 a が時空的性質 (≡現象的側面) F を持つ、とは、それ自体では我々の認識から独立に存在するところの a が、《適切な状況下でならば、人間的感性形式を持つ認識主観によって F として認識される》という傾向性を持つ、ということである。そしてこの傾向性は、 a がそれ自体で持つ性質 (≡自体的側面) に根差す。

この分析は、色の傾向性分析と全く同様にして、時空的性質が主観依存的である、というカントの観念論的主張を保持しつつも、それを単なる見かけへと貶めることを回避する。

こうした分析に対しては反論もあるだろう。しかしながら、この種の説明が登場して以来、形而上学的二側面解釈は「現象」を仮象に貶める、と素朴に決めつけることは少なくとも不可能となった。また、形而上学的二側面解釈における物の自体的側面の想定を、時代遅れの悪しき「形而上学」として単純に切り捨てることもできなくなった。

前節で提示された、現象と物自体の同型性の問題に対しても、形而上学的二側面解釈を擁護することは不可能ではない。形而上学的二側面解釈は確かに、認識独立的な自体的側面を持つ個々の何かが、それに対応する個々の時空的対象として現象する、と主張する。しかしながら、現象してくる当の「何か」が、それ自体において個別の実体である、とまで主張される必要はない。その「何か」は、叡知の実体の部分であるかもしれない、あるいはそれらの集合で

あるかもしれない、あるいはそれらの性質であるかもしれない、あるいはそれらの間の関係であるかもしれないのだ。こうした可能性が少なくとも排除されない、という点に鑑みれば、《現象レベルの個物にはそれぞれ、物自体のレベルで何かが対応する》と言ったところで、カントが禁じるような、物自体についてのいかなる実質的知識ももたらされない、と論じることもできるだろう（詳細は KORW, pp.52-6を参照）。

さらに、方法論的二側面解釈、とりわけその非形而上学的性格に対する積極的な批判も提起されている。まず思いつかれるのは、カントは実際に、現象よりもより高い存在論的ステータスを物自体に認めていたのであり、方法論的二側面解釈はこの事実を無視している、というものである（典型的な例として Ameliks 1992, p.334を参照）。カントを現代人の「口に合う」ものにしようとするあまりカントその人の意図を見失ってしまうなら、解釈としては失格だ、というわけである。関連する批判として、方法論的二側面解釈は、形而上学を避けようとするあまり、物自体の不可知性をトリヴィアルな分析的真理にしまっている、との

批判もある⁽¹¹⁾。——アリソンはこうした批判に応答しよう
と努力してはいるが (cf. Allison 2004, pp.18f, 42-9)、論争は
かみ合っていないとの印象を禁じ得ない⁽¹²⁾。

さて、二世界解釈、形而上学的／方法論的二側面解釈そ
れぞれの問題点が認識されるにつれて、Robinson 1994の
「二バースペクティブ解釈」や Hanna 2001の「二概念解
釈」のような、これら三者とは異なる「代案」を自称する
解釈図式も提案されるようになった。こうして、論争状況
はますます混乱の度合いを増し、現在に至るまで続いてい
る。

三 実在論的／反実在論的解釈の 区別による諸解釈図式の整理

第一節で述べられた通り、二世界／二側面解釈の論争の
もともとの出発点は、超越論的観念論が観念論の形而上学
を提示するものであるか、それとも、常識的な実在論の見
解にそれほど離反しないような、穏健な立場として理解す
ることができるか、ということをめぐる対立であった。そ

してこのことは、論争の端緒においてはそうであった、と
いう単なる解釈史上の一コマに留まるものではない。この
対立軸こそが中心的な問題であり、これに注目することで、
二世界／二側面解釈をめぐる今日の論争の錯綜した状況に
見通しの良い整理が得られる、と私は論じたいと思う。

このことを示す前に、今までの論述で漠然と「常識的実
在論よりの解釈」・「観念論的解釈」と呼ばれてきたもの
の内実をより正確に規定することにしよう。

我々が経験的に認識する事物の少なくともその時空的な
あり方は何らかの意味で主観依存的・認識依存的である、
とカントは確かに主張しており、そして少なくともこの点
で、カント批判哲学は常識的実在論と完全には一致しない、
ということ⁽¹³⁾は、(Langton 1998)のような極端な実在論的解釈者
を除き) ほぼ全ての解釈者が同意するところであろう。し
かしながら、カント哲学を常識的実在論により近い立場と
して理解しようとする陣営からは次のような解釈がなされ
る…

実在論的解釈…時空的性質はともかく、我々が経験的

に認識する個々の物の存在は、我々の認識・表象から独立である。

こうした見解の表現の例として、ここでアリソンのものを挙げておこう：

「カントの超越論的観念論」は、我々は実在的な、心から独立な *mind independent* 対象を認識する（それがそれ自体であるようなあり方ではないにせよ）と主張するがゆえに、その立場は現象主義的ではない。」（Allison 1996, p.3）

「超越論的実在論の」誤りは、物はその人間的感性条件との関係から独立に存在する、と想定することなどではない（カントも同じくそのように想定する）。（Allison 2004, pp.24f.）

認識独立性／依存性の概念のより詳細な規定のためには独立の論考を必要とする。⁽¹¹⁾ここでは、以降の議論に必須と思

われる限りでの説明を与えるに留める。

第一に、実在論的／観念論的解釈の相違は、我々が経験的に認識する物の存在性格に関わるものである。古い文献では、物自体の存在を認める立場が一樣に「実在論的」と称されることがあるが（cf. Adickes 1924, Paton 1936）、これは本論文における意味とは異なる。

第二に、上で「実在論」と呼ばれているものは、少なくともカントが「経験的実在論」と呼ぶものとは異なる。ともうのも、カントの「経験的実在論／観念論」の区別はもっぱら《外的認識は確実とみなされ得るか否か》という認識論的問題に関わるものであるが、上で「実在論」と呼ばれているものは《経験的対象の存在は認識独立のか否か》という存在論的問題に関わるものだからである（この詳細については KORW, p.58f.を見よ）。これが、カントの言うところの「超越論的実在論」に相当するかどうかは、まさに議論が分かれる点である。観念論的解釈者はそうだと主張するだろうし、実在論的解釈者は当然のことながらそれを否定する。というのも、もし上の意味での「実在論」が超越論的実在論に相当するならば、それが超越論的観念論解

釈として不適切であることは明らかだからである。——「実在論／観念論」といった、カント哲学外から持ち込まれた分析用語をあまりに早急にカントの術語に対応付けようとする、解釈論争においては論点先取になってしまうかれない。読者はこの点に十分注意されたい。

より重要なのは次のことである。「物の認識独立性」とは、単に《実際に知覚されなくとも物は存在する》といったことではない。(第一節で述べられたように、この程度のことならば現象主義によつてすら問題なく承認され得る。)それはむしろ、諸物が、我々の認識とは関係なく、それ自体で個々の物として存在する、というより強い主張である。——我々にとつては、それら個物は主観依存的な時空的あり方によつて区別されるにしても、このことは単に我々の認識に関することがらにすぎない。それらが異なる物として存在する、ということは個物そのものの側ですでに決まっている事実であり、我々の認識やその制約といった主観的要因に左右されない。こうした強い意味における認識独立性の主張こそ、実在論の主張の核心なのである。

これに対し、観念論的解釈は、個々の時空的事物の存在

も、我々の認識——現実的認識のみならず可能的認識をも含む——に依存するものとみなす。それによれば、時空的事物が存在する、ということは、我々がこのことを認識する、ないしは可能的状況ならばそのように認識されるであろうからだ、ということになる。(こうした一般的な説明では今一つ内容がイメージできない、という読者は、第一節で紹介された現象主義を想起されたい。)

〔「可能的認識」ということの内実——例えば、「シーザーがルビコン川を渡る間、彼は三回くしゃみをした」ということは、現在においてはすでに認識不可能なことであろうが、とはいえ別の意味で「認識可能」なことの中に含まれるのか?——に依じて、観念論的解釈には様々なヴァージョンが生じてくる。カントの時空的対象の存在論に適切な「認識可能性」概念を画定することは、観念論的解釈にとつて重要な課題である。しかし、ここでこの問題に深入りする必要はない。観念論的解釈は、実在論的解釈が主張する、個々の時空的対象の存在の強い意味での認識独立性に対するアンチテーゼである、ということだけで以下の議論のためには十分である。〕

観念論的解釈からは、《時空的事物に関しては、認識不可能であるようなものはそもそも存在し得ない》という帰結が即座に導かれる。この帰結にカントが同意していると思われる箇所は多くある（特に『純粹理性批判』のアンチノミー論を参照）。實在論的解釈者の中には、特に問題を感じることなく、自らの解釈がこの帰結を受け入れ得るものと単純に想定する者がいるが、そのようなことが可能であるかは疑わしく、それは少なくとも正当化が必要なことである。

この両者の相違は、特に超越論的観念論解釈を主題としない研究者ならば無関心でもいられるような、マイナーな論点に留まるようなものではない。それらは、現実世界についてのカントの存在論に対して根本的に異なる描像を与えるものである。實在論的解釈によれば、我々が経験的に認識する諸物は、我々の認識から独立に、それ自体で自己個別化を行っているものであり、認識主観は、そうした個物に対していわば「あとから」現れ、それらを認識する（それらがそれ自体であるあり方を認識するのではないにせよ）、ということになる。観念論的解釈によれば、経験的認識は、

いかなる意味でも、すでにそれ自体である世界の構造を写像するようなものではない。時空的世界はむしろ、我々の現実的ならびに可能的認識を通じていわば構成されるものなのだ、ということになる。

どちらの描像がとられるかによって、カント理論哲学の全体的枠組は全く違った仕方で理解されることになる。さらにそれは、自由の問題を通じて、実践哲学を含むカント批判哲学体系全体の理解をも左右する。（例えば、《我々は現象的存在者としては自由ではないが、道徳的主体としては自由である》というカント実践哲学の根本主張はどのような存在論的枠組のもとで理解されるべきなのか？）従って、實在論／観念論解釈のうちどちらをとるか、ということとは、本来、いかなる個別主題を扱うカント解釈者も無関心であったり、未決定で済ませておいたりすることはできない問題なのだ。

さて、實在論的／観念論的解釈の区別は、現在の論争における諸解釈の乱立を整理するどのような有益な視点を提示するのだろうか？ 以下で私は、(一)形而上学的二側面解釈、(二)方法的二側面解釈、(三)世界解釈ならびにその他

の順で論じていくことにする。

(一) 形而上学的二側面解釈の提唱者は、上で「實在論的解釈」と呼ばれた立場への志向を自ら表明する傾向がある。

さらに、単にこうした事実にとどまらず、いかなる形而上学的二側面解釈も實在論的解釈であらざるを得ない、ということを論証することもできる…

一・形而上学的二側面解釈は、我々が経験的に認識する一つの同じ物が、現象的性質に加えて、認識独立的な自体的性質をも持つ、と想定する。(これは形而上学的二側面解釈の定義的要件である。)

二・しかしながら、ある物が認識独立的な性質を持つならば、その当の物は、認識から独立に存在するのでなければならぬはずだ。というのも、認識依存的に存在する物が、認識独立的な性質をも持つということはありえないからだ。

三・従って、形而上学的二側面解釈は、我々が経験的に認識する物は、我々の認識から独立に存在する、と想定せざるを得ない。これは實在論的解釈に他ならない。

このことに加えてさらに、いかなる實在論的解釈も形而上学的二側面解釈であらざるを得ない、ということが示され得る。このことを私は以下の考察において示すであろう。

(二) 私はすでに千葉 2012b で、方法論的二側面解釈の典型と広く認知されているアリソンのものに関して、それが本質的な不整合を含むということを示した。この議論を繰り返すことはせず、ここでは、「方法論的二側面解釈」と呼び得る立場一般について論じる。

この問題を扱う際の困難は、すでに前節で指摘されたが、検討の対象となる方法論的二側面解釈の本質(特にそれが正確にはどの点で形而上学的二側面解釈と異なるのか)が不明瞭なことである。従って、以下で私はむしろ、二側面解釈一般について考察し、それが形而上学的二側面解釈以外のオプションを持ち得るのか、持つとすればそれはどのようなものとなるのかを検討する。個々の方法論的二側面解釈者がどのような立場を提唱するのであれ、それは、以下で提示されるものの少なくともいずれかに該当するはずだ。この考察の際に有益な視座を提供するのが、上述の實在論

的／観念論的解釈の区別である。

方法論的二側面解釈者はこの区別に対してどのような立場をとるのだろうか？ まず、彼らは一般に實在論的解釈を志向する、と結論できそうなくつかの状況証拠がある。まず、先の引用が示す通り、方法論的二側面解釈者らが一律に依拠しているアリソンが与すると公言しているのは實在論的立場である。また、彼らは明示的に現象主義解釈を否定するが、観念論的二側面解釈はこれと両立可能である。さらに、カント哲学をより常識に近い立場として理解しようとする彼らの意図からすれば、彼らが時空的対象の存在についての観念論に与するとは考え難い。仮に、観念論は通常想定されるほど常識的世界理解から乖離していないと主張するつもりならば、それなりの議論を提示する必要があるはずだが、方法論的二側面解釈者でそのようなことを行っている者はただの一人としていないのである。

提唱者自身の態度決定はどうであれ、そもそも「二側面解釈」と呼ばれ得る立場の観念論的ヴァージョンを採用しないことにはよい理由がある。それは、その内実が十分に自覚されるならば、全く魅力的なオプシオンには見えない

のである。ここで、観念論的二側面解釈なる立場がどのようなものとなるはずなのか、ということを見ていくことにしよう。

それは、まず、観念論的解釈の一ヴァージョンとして、我々に経験的に認識される当の物は我々の認識に依存してのみ存在する、と主張するはずである。それはさらに、二側面解釈として、現象と物自体は、まさにこの認識依存的に存在する物が持つ二つの側面なのだ、とも主張するはずである。さて、一般に、認識依存的に存在するものは、認識独立的な側面を持つことはできない⁽¹⁶⁾。従って、観念論的二側面解釈は、「物自体」——正確には、物の「自体的側面」——と呼ばれるものすらも、何らかの意味で我々の認識ないし表象活動に依存するものだ、と想定せざるを得なくなる。

物の「自体的側面」が認識に依存する、とはいささか奇妙な主張である。とはいえ、この問題にここで深入りする必要はない。(興味のある読者は KOW, p.77 を参照されたい。) このことにはいかなるよい説明が与えられようとも、観念論的二側面解釈は、別の論点で困難に行き当たる。その論点

とは、認識独立的なものを認めるか否か、ということである。

いわゆる「触発」の問題として有名なものだが、カント理論哲学の核心的要素の一つである経験的認識の受容性に鑑みれば、我々のうちに経験的認識のための質料を生ぜしめる、それ自体は我々の認識に依存しないようなもの——それが「物自体」と呼ばれようが呼ばれまいが——の存在が認められなければならないように思われる。あるいは、そうしたものは理論哲学上は認識不可能だとしても、少なくとも思考され得るものとしてカント理論哲学体系に属することが認められなければならないように思われる。(後者の場合には「認識独立的なもの」の概念のみが認められ、前者ではさらにその概念が表わすものの実在も認められることになる)。さて、観念論的二側面解釈の枠組みにおいてこうした認識独立的なものが認められるとすれば、それは、我々が経験的に認識する物——さらにそれに関して現象的側面と自体的側面が帰されるのであった——とは数的に異なる存在者とされざるを得ない(というのも、認識独立的に存在するものと認識依存的に存在するものが同一であることはあ

り得ないから)。しかしこれはまさに、二世界解釈の根本的主張を受け入れることに等しい。そして、このことを受け入れた上でさらに、「物自体」という用語を、この認識独立的なものではなく、認識依存的に存在する経験的対象の側面のみを表すものと限定するのは極めて不自然であり、到底擁護できるものではない。

こうした帰結を避けるためには、認識独立的なもの一般、その概念すらも、カント哲学体系においては認められない、とするよりほかない。さて、そのようにすれば、悪名高い「物自体」の存在主張や「超越論的触発」の理説という形而上学的思弁にコミットしない、より魅力的で我々の常識に近づいた解釈図式が得られるのだろうか? 断じて否、である。というのも、そのことよって得られるのは、超越的形而上学を排した経験的現実の超越論的分析、などという口当たりのよい立場などではなく、むしろ、経験の対象ばかりかおおよそ全てのものを我々の認識ないし表象活動に依存するものとみなす極端な観念論的立場に他ならないからである。

実のところ、こうした極端な観念論的解釈を十分に論駁

するためにはより詳細な議論が必要ではあるのだが、ここでそれを行うことは控える。(興味のある読者はKORW第82節を参照されたい。)ここで指摘されるべきなのはむしろ次のことである。アリソン以前の、方法論的二側面解釈者の先駆者のうちには、「物自体」の存在主張(あるいは自体的側面の認識独立性)を否定する者がいるが、彼らはいいての場合、自らの立場が上述のような極端な観念論に行き着いてしまう、ということを見過(11)している。もしこのことに注意が払われたならば、彼らがそうした立場を受け入れたどころか、それをそもそも検討に値するものと考えたかすら疑わしい。というのもそうした極端な観念論は、方法論的二側面解釈者が典型的に志向する、常識により近い立場とはまさに正反対のものだからである。

それでは、方法論的二側面解釈者が實在論的二側面解釈をとるとしたらどうであろうか。実のところ、この方向性もまた、彼らにとつては大した救いにはならない。いかなる實在論的二側面解釈も、形而上学的二側面解釈と本質的に相違がないか明らかにもっと悪いものにならざるを得ない、ということを一般的に——個別の例を一々検討する必

要なく——論証することができるからだ。その論証は以下のものである：

一、物の現象的側面は、我々の直観形式との関係においてのみ物に帰される。(この前提は、Langton 1998のような極端な實在論的解釈者を除けば、ほとんどの二側面解釈者に問題なく承認されるものである。)

二、経験の対象についての實在論想定からすれば、我々が経験的に認識する物そのものは、我々の認識から独立に存在する。(こうした認識独立的な物は、その現象的側面に關して我々に認識される。)

三、しかしながら、我々の認識から独立に存在するようなものは、我々との関係——ここでは特に、我々の直観形式との関係——から離れても、何ものかでなければならぬ、すなわち、それ自体において何らかの性状(Beschaffenheit)を持つのでなければならぬ(そうした性状は我々には認識不可能であるとしても)。というのも、我々の認識から独立に存在するものが、それ自体においてはいかなる性状をも持たない、と想定する

ことは不合理だからである。

四、しかしながら、認識独立的な物がそれ自体において持つ性状とは、形而上学的二側面解釈において物の「自体的側面」と呼ばれていたものに他ならない。従って、いかなる實在論的側面解釈も、形而上学的二側面解釈の基本図式を受け入れざるを得ない、ということになる。

ここで「物がそれ自体において持つ性状」と言われているものを、方法的二側面解釈者は、現象／物自体のカント的区別で問題となるような「自体的側面」とは呼ばないのだ、と言ってみたところで助けにはならない。上の論証が示すことは、何と呼ぼうが呼ぶまいが、非一形而上学的な二側面解釈を自認する者ですら、形而上学的二側面解釈者が「自体的側面」と呼ぶものを、まさに彼らの図式の内部で認めざるを得ない、ということだからである。彼らがそれをあえて「自体的側面」とは呼ばない、と決意するならば、その際にはいわば「三側面解釈」とでも呼ばれるべきものが提唱されることになる。しかしながら、こうした側

面のインフレーションをまともな解釈オプシオンとして受け入れようとする者はいないだろう。

前節で、方法的二側面解釈の形而上学的二側面解釈との違いの實質を捉えることの困難が指摘された。上の論証は、この困難が何に由来するかを説明する。実のところ、アリソンと共に暗黙のうちに實在論的立場をとる多くの方法的實在論的解釈者の立場は、まさにその實在論的想定ゆえに、形而上学的二側面解釈と本質的に違いがないものへと帰着せざるを得ないのだ。彼らによる「観点」のジャーゴンの使用は、この事実を隠蔽する機能しか持たない。——さりとて、この實在論的想定を避けようとして觀念論的側面解釈に救いを求めたところで、行き着くのは初めの目論見とは正反対の、標準的ニ世界解釈や現象主義解釈よりもさらにたちの悪い、極端な觀念論的立場でしかない。

今や我々は次の診断を下すことができる…實在論的／觀念論的解釈のどちらをとっても、方法的二側面解釈は窮地に追い込まれる。このことが今までに表面化してこなかったのは、その提唱者たちが、自説の内実とそれが行き着

かざるを得ない諸帰結に関する十分な自覚を持っていないからであるにすぎない。

(三)二世界解釈については第一節で十分に規定されたので、そこでその内実を繰り返すことはしない。(とはいえず、以下の議論のため、とりわけ次の二点に再び読者の注意を促すことにしておこう。(a)二世界／二側面解釈の対立は、我々が経験的に認識する個々の物に関するものである(上七頁)。(b)二世界解釈そのものにとって、物自体の存在主張の肯定は必要ではない(上六頁)。

第一節で述べられたように、二世界解釈は観念論的解釈と親和性が高く、実際、解釈史においても、両者はたいていの場合同一視されてきた。しかしながら、上述の規定からすれば、二世界解釈の実在論的なヴァリアントも初めから排除されるわけではない。この解釈オプシジョンに関しては後で論じる。

次に、二世界／二側面解釈両者に対する代案と自称するものを検討しよう。一つの例は、Robinson 1994の「ニ・パース・ペクタイプ説」に代表される、現象と物自体を個々の物ではなく、世界の二つの側面として理解するものである

(この立場の最近の提唱者としてはOnof 2010を参照)。これは本当に、個別の類をなすような「代案」たり得るのだろうか？

この問題を扱うにあたっては、實在論的／観念論的解釈の区別が有用な視座を与えることになる。そのような解釈の立場の提唱者は、實在論的解釈をとった上で——すなわち、個々の対象は我々の認識から独立に存在する(個体化されている)と想定した上で——、単に、《我々が現象として認識する対象は、それ自体のレベルで個々の物、すなわち叡知の実体である》ということを否定したいだけなのかもしれない。しかしながら、前節で確認されたように、このようなことであれば形而上学的二側面解釈の枠内でも問題なく否定され得る。従って、このヴァージョンは、形而上学的二側面解釈に代わる別個の解釈図式を提供するものとはなり得ない。

あるいは、その提唱者は、ロビンソンにおいて顕著であるように、観念論的解釈をとっているのかもしれない。しかしその場合、この解釈オプシジョンはオーソドックスな観念論的ニ世界解釈と大差ないものとなる。第一に、それは

二世界解釈と同様、我々が経験的に認識する個々の物が、それ自体のレベルですでに自己個別化しており、そうした自己個体化している何ものかが我々に時空的対象として現象する、という想定をいずれにせよ拒否せざるを得ない（これを拒否しないならそれは上で論じられた實在論的ヴァージョンに帰着することである）。第二に、時空的現実はそれ自体で存在する世界が我々に現象してきたものである、ということであれば、二世界解釈の枠組みにおいてすら主張可能なことである。名称が示唆することとは異なり、「二世界解釈」は、現象界と叡知界が何の関わりもなく併存している、と主張するわけではない。その典型的なヴァージョンによれば、叡知界は触発を通じて我々のうちに感覚を生ぜしめ、我々はそれをもとにして現象界をいわば「構成」する。このように、叡知界が現象界の基盤を与える、という意味で、二世界解釈においても、現象界は、叡知界の「現象」である、と問題なく言われ得る。¹⁰¹

さて、この他にも、二世界／二側面解釈の代案を自称する解釈は存在するし、また、今後も現れ続けるであろう。そうした「代案」は、二世界／二側面解釈についての誤解

（あるいは戯画化）に基づくのかもしれないし、あるいは、諸解釈図式の「いいとこ取り」をする斬新な解釈を提案しているように見えて、実は単に、その内的矛盾に提唱者が気づいていないだけだ、といった類のものであるのかもしれない。いずれにせよ、そうした「代案」を一挙に否定するような論証が得られれば望ましいことであろう。以下で私は、特に實在論的解釈に関して、その可能なオプションを一般的に制限する論証を提示する。

テーゼ・實在論的解釈のうちで検討に値する解釈オブションは、形而上学的二側面解釈で尽くされる。それ以外を自称するものは、内的不整合を犯すか、あからさまに魅力がないものになり下がるか、あるいは結局のところ形而上学的二側面解釈に帰着する。

論証：

一．カント批判哲学の枠組みにおいては、少なくとも時空的性質は、何らかの意味で主観依存的である。（この前提は、Langton 1998 のような極端な實在論的解釈者を

除き、ほとんど全てのカント解釈者にとって問題なく承認されよう。)

二、ある實在論的解釈が、形而上学的二側面解釈の代案を自称するものとせよ。それは、少なくとも、實在論的解釈として、次のように主張するはずである…我々が時空的対象として認識する個々の諸物は、我々の認識から独立に存在する——二世界解釈が言うように、それらそのものが時空的であると解されるのであれ、形而上学的二側面解釈が言うように、それらはそれ自体では時空的ではなく、単に我々に時空的に現象してくるだけのことであり、とされるのであれ、あるいはそれ以外の場合であれ。

三、しかしながらその場合、これらの諸物には、(一より)何らかの意味で主観依存的である時空的性質の他に、さらに、その諸物のそれぞれがそれ自体で持つような認識独立的性状 (Beschaffenheit) もまた帰属するはずである。というのも、我々の認識から独立に存在するものが、我々の主観との関係を離れては何ものでもない、すなわち、それ自体ではいかなる認識独立的

性状も持たない、ということとは不合理だからである。しかしながら、こうした認識独立的性状は、形而上学的二側面解釈で言われるところの、物の「自体的側面」に他ならない。

四、よって、形而上学的二側面解釈の代案を自称する實在論的解釈のヴァージョンは、形而上学的二側面解釈が物の「自体的側面」と呼ぶものを否定することによって自らの實在論的主張との内的不整合を犯すか、形而上学的二側面解釈が言うところの「現象的側面」と「自体的側面」の他にさらに別の側面なり世界なり(あるいはそれ以外なものなり)を付加することを強いられることによりあからさまに魅力のない立場になり下がるか、あるいは結局のところ、形而上学的二側面解釈と本質的には相違のないような立場に落ち着かざるを得ない。

この論証の効力を確認するために、先に言及された、實在論的、二世界解釈について考えてみよう。このような解釈は、ひよつとすると、我々に時空的個物として現象するものは、

それ自体のレベルで自己個体化しているような何ものかであるとはいえ——これは、實在論的解釈を採る限り避けられない想定である——少なくとも徹知的実体ではない、と主張したいだけなのかもしれない^(三)。しかしながら、再三確認されたことだが、この程度のことであれば、形而上学的二側面解釈によってすら問題なく承認可能である。

あるいは實在論的二世界解釈は、むしろ次のような主張をなすものであるのかもしれない…時空的対象は、現象として、経験的に認識可能なものであるが、にもかかわらず、我々の認識からは独立に存在する。さらにそれらと数的に異なるものとして、我々に認識不可能な「物自体」(あるいは「ヌーメナ」)が存在する(あるいは少なくとも考えられる)。

これに対して、上の議論からは次のような診断が与えられよう…こうした解釈オブションは、それが「現象」と呼んでいるものに関して、その主観依存的な時空的側面と、主観独立的な「自体的」側面を区別せざるを得ない。そして、この解釈オブションが現象の他にさらに別の存在者を「物自体」として設定することによって、それはいわば「三

世界解釈」——より正確には、「二側面十一世界解釈」——とも呼ばれるべき立場へと行きつく。こうした世界のインフレーションを支持するような解釈上の証拠はどこにもないし、いずれにせよそのような立場に魅力を感じる解釈者はほとんどいないだろう。我々に決して認識され得もしないような存在者(例えば神)を認めるという目的のためならば、形而上学的二側面解釈がそうするように、《存在者のうちには、自体的側面のみを持ち、決して現象しないものも存在する》と言った方が説明としてずっとすっきりしている。

(さて、観念論的解釈に関しても、検討に値するオブションは二世界解釈のみである、と結論できそうである。というのも、先の(二)において示された通り、観念論的二側面解釈はいずれにせよ魅力のないものとならざるを得なさそうだからである。とはいえ、こと観念論的解釈に関しては、二世界的でも二側面的でもないヴァージョンが可能であるかもしれない(少なくとも私は、そのような立場が不可能である、ということの論証を持ち合わせていない)ので、ここで私は可能なオブションをあえて限定しようとすることは控え

る。観念論的解釈は現在一般に——少なくとも超越論的観念論を専門的に論じている解釈者の間では——あまり人気のない立場であり、その可能性が十分に吟味・展開されてきたわけではないため、従来思いつかれもされなかつた解釈可能性が手つかずに残っている、ということが十分にあり得る。

私は、上述の論証が決定的である、とまで主張しようとは思わない。しかし、それは少なくとも、形而上学的二側面解釈と観念論的解釈両者に対する代案を提示することは極めて困難であること、そして、實在論的／観念論的解釈の対立ということが、諸解釈オプションの性格づけにとつて中心的な重要性を持つ、ということを明らかにするには十分であろう。超越論的観念論ないし現象と物自体の区別についての解釈を志す全ての解釈者に対して私は、まずこの対立に関する自らの態度決定を明瞭にすることを提案したい。そうすれば、可能な解釈オプションはおのずから限られてくる。それらに対する「代案」を提示しようとする者は、そうした立場にはすでにその定式のレベルで特別の困難が存する、ということを少なくとも自覚するべきであ

る。——このようにして解釈が練り上げられるならば、今日見られるような諸解釈図式の無秩序な乱立は大部分避けられることであろう。

四 實在論／観念論区別のさらなる効用

實在論的／観念論的解釈の対立に注目することは、現在の諸解釈を整理するために役立つだけではない。それは、二世界／二側面解釈を巡る現在の解釈論争を、カントの単なる言い回しについての争いから彼の主張とその議論についての実質的考察へと差し戻し、カント哲学解釈全体にとつてより実り豊かなものとするにも寄与する。最後にこの点について手短かに指摘しておくことにしたい。

単なる言い回しのみ注目するならば、第一節で指摘されたように、二側面解釈に分があることは否定できない。さらに、二側面的言い回しの典型的なもの——《我々は物を、それがそれ自体であるようにではなく、それが我々に現象してくるような仕方認識するにすぎない》といったもの——は實在論的、二側面解釈（これはすなわち形而上学的

二側面解釈に他ならない)を強く示唆するものである。

しかしながら、この一見して明白なテキスト的証拠にもかかわらず二世界解釈者が尽其くことがなかったのは、単に二世界的な言い回しも見られる、といったことのみによるのではない。より重要な理由は、二側面的言い回しが示唆する実在論的立場には両立しないように思われる、単なる言い回しを超えた実質的議論が提示されているテキスト箇所が存在する、ということである。その顕著な例としては、『純粹理性批判』第一版「第四パラロギスム」ならびにアンチノミー論が挙げられる。こうした箇所における中心的議論は時空的対象についての実在論のもとでは説明され得ない、ということが成功裏に示されるならば、それはまず実在論的解釈に対する強力な批判となり、ひいては二側面解釈に対しても重大な困難を突きつけることになる。

さて、このことに二世界解釈者が成功するとしても、彼らの立場はまだ安泰となるわけではない。『純粹理性批判』のうちには、先のものとは逆に、時空的対象の存在についての実在論的主張が本質的な役割を果たしているように見

える議論もまた存在する。その典型例は第二版「観念論駁」である。二世界解釈者は、こうした箇所におけるカントの議論が、彼らが受け入れる観念論的解釈の枠組みに整合的である、ということを示し得るものでなければならない。また、二側面的言い回しにまつわる問題もまた、無視できるものではない。言い回しそのものは措くとしても、そうした言い回しが議論に本質的な役割を果たしているように見える箇所が存在する。それは例えば、「超越論的感性論」ならびにカント自由論における自我の二面性の教説である。二世界解釈は、こうした箇所の、少なくともその中心的議論に整合的な説明を与えることができるのでなければならない。このことに成功するならば、言い回しは些末な要件にすぎず、カント理論哲学全体を整合的に理解するための解釈図式としては二世界解釈こそふさわしい、と主張することも可能となる^(三)。

これとは逆に二側面解釈を擁護しようとする場合にも、同様の課題が生じてくる。まず、それが実在論的解釈に与するならば、そのことをしっかりと自覚した上で——都合のよい時には実在論、悪い時には観念論を無自覚に持ち出

す解釈者は少なくないが、そうしたやり口は不整合以外の何ものでもない、ということが肝に銘じられるべきである

——実在論的解釈の積極的証拠の提示、ならびに観念論的解釈側からなされる批判に自らが耐え得ることの証示がなされなければならぬ。観念論的二側面解釈に関しては、同様の課題以前に、それが結局のところどのような立場に行きつくものかをごまかしなく確定した上で、それがそもそも検討に値する解釈オプシオンであり得る、ということを示すことから始められなければならないだろう。

いずれの場合においても、それぞれの立場を正当化する際に依拠されるべきものは、カントの単なる言い回しではなく、彼の諸議論である。そして、実在論的／観念論的解釈の区別は、従来「二世界／二側面解釈」と呼ばれてきたものにおいて何が根本的な問題であったのか、そして、そのそれぞれの正当化のためにはカントの特にどのような議論が考察の対象にされるべきなのか、ということを明瞭にする。この区別の観点から見られるならば、二側面的言い回しを二側面解釈の決定的な証拠として持ち上げる、今日の解釈論争においてしばしば見受けられる論法（三）がいかに不

十分かつ不適切なものであるかが理解されよう。論争において注目されるべき論点は他にも多く（そしてより重要なものすら）あるのだ。二側面的言い回しは、その際に考慮されるべき一案件であるにすぎない。

こうして、実在論的／観念論的解釈の区別は、二世界／二側面解釈をめぐる解釈論争を、単なる言い回しに関する争いから、カントの諸議論ならびにそれから導かれる結論の内実の解明、という、カント解釈本来の課題へと引き戻す。また、このことによつて、件の解釈論争は、カントの個々の理説の解釈に従事する研究にとつても無視できないものとなる。というのも、個々の理説の解釈もまた、全体の整合性を顧慮しないわけにはいかないからである。例えば、二世界解釈に親和的な言明が多く見られる『純粹理性批判』アンチノミー論の解釈においてすら、それを二世界の枠組みのもつて理解することが本当に適切なのか、反省されて然るべきである（というのも、『純粹理性批判』全体を見るならば、二世界解釈を問題的なものとするテキスト箇所も多く見いだされるのだから）。

そして私は最後に強調したい。まさにそれが実在論的／

観念論的解釈の対立に関係することによって、二世界／二側面解釈を巡る論争は、理論哲学・実践哲学を問わず、カント哲学におけるいかなる主題を扱う研究者にとっても本来避けては通れないはずのものとなる。というのも、その論争において問題になっていることは、単にカントの一面矛盾した諸々の言い回しがどう処理されるべきか、ということではなく、カント批判哲学体系がそのもとで展開されている存在論的枠組みはどのようなものなのか、ということだからである。カントの諸議論を単に断片的に扱うのではなく、その全体的脈絡において検討し、そしてその哲学的意義を明らかにしめんとする研究にとって、二世界／二側面解釈を巡る今日にまで続く論争は、その際に避けて通れない考慮されるべき多くの論点を明瞭ならしめ、さらにそれらについての考慮に値する議論の蓄積を提供するものとなることであろう。^(四)

註

*カントの著作からの引用は慣例に従い、『純粹理性批判』に関しては第一版と第二版の頁数を、それ以外の著作については、アカデミ版 (AA) の巻数とその頁数を示した。また、引用中の「[...]」は私による補足である。

(一) 二世界／二側面解釈を巡る論争についてのサーヴェイ論文はすでに多くある。代表的なものとして、Ameriks 1982, 1992, Robinson 1994, Willaschek 2001, Allais 2004, Schüling 2010a を参照。Schüling のものは最近の展開までを包括した詳細なものであるが、論争状況の全体を統一的に見渡す視点を欠いているため、かえって現状の混乱状態を顕にする結果となっている。

(二) 日本において例外的に二世界／二側面解釈を巡る問題に触れているものとして、例えば中島 2004、牧野 2012 を参照。しかしながらこれらはいずれも、この問題の扱いはごく簡単なものに留まっている。

(三) 代表例は Bennett 1966, Aquila 1979, 1983, Van Cleve 1999 である。また、その例として Turbayne 1955, Strawson 1966 が挙げられることも多い。これらは全て二世界解釈の例でもある。しかしながら、Schüling 2010b のように、二世界解釈をとりながら現象主義解釈は否定する者もいる。

(四) 現象主義的解釈に対する批判者の多くはこの点を誤解した上で現象主義解釈を批判している。典型的な論法の例として、Allison 1987, p.159, Allais 2004, pp.663f., Ameriks 2006, pp.79ff. を参照。

(五) とはいえ、こうした動機が明示的に表明されることは稀ではある。稀有な例として Collins 1999, p.3 ならびに Langton 2001, p.61 を参照。

(六) 観念論的解釈を忌避する動機として文献においてしばしば挙げられるものの中には、「一見すると」解釈内に在的なものもある。観念論的解釈が正しいとすれば、カントの立場は、彼自身が否定しているパークリーの立場と結局のところ同じものとなってしまふ、というのがそれである。——観念論的解釈に対するこのような批判は、否定されるべき「パークリーの観念論」についてカント自身は与えている規定を無視した上でなされることを常とする（詳細はKORW 第23節(B)ならびに第52.3節を参照）。とはごえ、こうしたおびやかな批判がある程度通用してしまうのも、「観念論や現象主義をカントに帰する解釈はともかく否定されるべきだ」という、英語圏の研究に顕著な「前提が明らかじめるがゆえのこと」なのだろうと私は推測する。

(七) 実際、「二世界解釈」よりは幾分ましなものと思われる「二対象解釈 two-object interpretation」(Aquila 1979)「やむに、私にはより適切であると思われる「非同一性解釈 non-identity interpretation」(Wood 2005)という名称も提案されたが、定着しなかった。

(八) 他には例えば次の箇所を参照：BXVIII Anm. A38/B55、B56、B306、A546/B574、Prolegomena, AA4: 344, Grundlegung, AA4: 451, 453, Kritik der praktischen Vernunft, AA5: 95, 97f., Kant's Brief an Garve am 7. Aug. 1787, AA10: 341, Fortschritte der Metaphysik, AA20: 270.

(九) Wood 2005 (p.74) はこれを「二世界解釈にまつての「致命的な問題」として挙げている。これに対して私は「KORW, pp.392-6において、カントの自我の二面性の教説に「二世界的な解釈を与えることを試みた。」

(一〇) そのような箇所としては例えば A288/B344, Grundlegung, AA4, p.451, Metaphysik Morgonovius, AA29, pp.924f. を参照。

(一一) 例えば Allison 1983, pp.26f, 2004, p.36 を参照。また逆に、上で紹介されたカントの二側面的言い回しを「二世界解釈の枠組みで

再解釈する試みもありはする (cf. Van Cleve, pp.145f.) が、それは同程度の成功を収めるには至っていないように思われる。

(一二) この問題については例えば Allison 1987, 1996 や Robinson 1994 による論争を参照。

(一三) 形而上学的二側面解釈の例としては次を参照：Adickes 1924, Paton 1936, Sellars 1968, Ameriks 1992 etc., Collins 1999, Rogerson 1999, Alias 2004 etc., Wood 2005, Rossetti 2007.

(一四) Cf. Allison 2004, pp.16f.; see also Grier 2001, pp.86-90, Willaschek 2001, p.214, Roche 2013 p.592.

(一五) この点はすでに、方法論的二側面解釈の批判者たちによっても指摘されつづけた。Rogerson 1999, p.8, Alias 2004, p.681, Schulting 2010a, p.2等を参照。

(一六) Cf. Poegge 1991, Grier 2001, Quarford 2004, Bird 2006 and Roche 2013, Allison 1984 以前の方法論的「二側面解釈の先駆者」として挙げられるものが多くは Bird 1962, Matthews 1969, Prauss 1974, Pipin 1982 等である。しかしながら、彼らの解釈の「方法論的」性格は、アリストンの場合以上に明らかではない。特にプラウスのものについては、それを二側面解釈と呼ぶべきであるかどうかがすら疑わしい。この点に関しては KORW, pp.83f. を参照。

(一七) Willaschek 2001 は「*nya*常識実在論との両立性」という点に関して、形而上学的二側面解釈が古典的「二世界解釈より良い状況にある」ということではない、と評している (p.214, n.4)。

(一八) 形而上学的二側面解釈における不可知な自体的側面の設定が、否定されるべき悪しき「形而上学」ではなく、ということを示すことをそれ以前に試みたものとして Langton 1998 がある。しかし彼女は極端に走り、カント自身に反して「これは彼女自身が同書最終節で認めている」物の現象的側面すら主観依存的ではないと主張するに至った。彼女にとって、空間・時間は我々の直観形式にすぎ

ない、というカントの主張は廃棄されるべき悪しき観念論に他ならなかった。その哲学的価値はどうであれ、こうした解釈がカント解釈として適切ではないことは明白である。従って私はこの立場を形而上学的二側面解釈の例として取り上げることにはしないでおく。

(一九) 例えば、McDowell 1985 における、色の傾向性分析による道徳の客観性の説明の試みを参照。

(二〇) Rosefeldt 2007 は想定可能なくつかの反論に対してこの分析を擁護することを試みている。

(二一) への批判の代表者は Langton 1998 である。この論点の詳細は千葉 2012b, p.152f を参照。

(二二) 実際のところアリソンは、形而上学的二側面解釈と全く区別のできない立場を自説として提示している箇所もある。これについてはとりわけ彼のいわゆる「触発」問題の扱い (Allison 2004, p.67) を見よ。アリソンの立場が方法的二側面解釈と形而上学的なそれの間を揺らいでいる、とどう指摘はするに Guyer 1992, p.105f; ならびに Westphal 2001 によってもなされている。千葉 2012b において私はこの揺らぎは単にアリソンの不用心な定式によるような表面的なものではなく、彼自身の立場に内在する本質的な不整合によるものであることを示した。

(二三) これについては KORW 第一章、ならびに私が現在準備中の論文「ダメットによる実在論／反実在論定式・カント超越論的観念論解釈のために」を参照。

(二四) この問題を十全な仕方であり扱うためには、極めて詳細な考察が必要となる。私はこの問題を KORW 第七章 (pp.251-332) で扱った。

(二五) 例えば、Allison 1983, 2004 におけるアンチノミー論解釈を参照。Allais 2010 は色アナロジーを使用することにより、実在論的解釈のもともこのような帰結を肯定できる、と示唆しているが、

この考えは疑わしい。それに対する私の批判については KORW, pp.142-5 を参照。

(二六) このことがすぐに理解できない読者は、次の例を考えてみよう。シャロック・ホームズの存在は、コナン・ドイルの創作という知的活動に依存する。少なくともこの、コナン・ドイルによって創作されたホームズは、コナン・ドイルの創作活動に依存する以外の方を持つことはできない。

(二七) 例えば Matthews 1969, Bird 2006 を参照。Aquila 1979 はそうした論者の立場を総称して「非ニューメノン主義的解釈 (non-nominalistic interpretation)」と呼んでいる。

(二八) 私の知る限り、こうした帰結を自覚した上で方法的二側面解釈を受け入れている例は Pogge 1991 のみである。しかしながら彼ですら、極端な観念論が極めて問題的な立場である、という点を十分には考慮しているわけではない。

(二九) 再び、「性質」という語の代わりに「性状 (Beschaffenheit)」という語を用いたのは、「実体／性質というカテゴリーの規定は物自体には成り立たないかもしれないから、物はそれ自体では、「性質」と称され得るようなものを全く持たないものであるかもしれない」という反論を考慮していることである。とはいえ、これは単なる言葉遣いに関する論点にすぎない。

(三〇) ロビンソンが彼の「二パースペクティブ解釈」を二世界解釈から区別した理由は、彼が後者を、現象と表象を同一視するものとして定義したことによる。こうした定義の不適切性は、二世界解釈の代表例が Bennett 1966, Aquila 1979 による現象主義解釈であることを考えれば明らかである。なお、ロビンソンが本論文において「観念論的解釈」と呼ばれている立場に与していることは明らかであるが、彼が提唱するタイプの観念論がカントの立場として適切であるか、という点に関しても問題がある。これについては KORW 第 7.5.1

節を参照。

(三二) 以上の主張をなす自稱「二世界解釈」としては Walker 2010 を参照。

(三三) 以上で示されたような諸問題を一つ一つ解決して、実在論の二側面解釈に対する観念論的・二世界解釈の優位を立証する(三三)が、私が KORW 第 II 部全体を通じて目指した「ことば」である。

(三四) 典型的な例として Allais 2004 ならびに Roche 2013 を参照。

(三五) 本研究は、ヒュムボルト科研費 26370004 の助成を受けたものである。

参考文献

- Alekes, Erich 1924: *Kant und das Ding an sich*, Pan.
- Allison, Henry 1983: *Kant's Transcendental Idealism: An Interpretation and Defense*, Yale University Press.
- 1987: "Transcendental Idealism: The 'Two Aspect' View", in den Ouden, Bernard (hrsg.): *New Essays on Kant*, Peter Lang, 155-78.
- 1996: "Transcendental Idealism: A Retrospective", his 1996: *Idealism and Freedom*, Cambridge University Press, 3-26.
- 2004: *Kant's Transcendental Idealism*, Second and Enlarged Edition, Yale University Press.
- Allais, Lucy 2004: "Kant's One World", *The British Journal for the History of Philosophy* 12, 655-84.
- 2007: "Kant's Idealisms and the Secondary Quality Analogy", *Journal of the History of Philosophy* 45, 459-84.
- 2010: "Transcendental Idealism and Metaphysics: Kant's Commitment to Things as They Are in Themselves", *Kant-Yearbook* 2, 1-31.

- Ameriks, Karl 1982: "Recent Work on Kant's Theoretical Philosophy", *American Philosophical Quarterly* 19, 1-24.
- 1992: "Kantian Idealism Today", *History of Philosophy Quarterly* 9, 328-42.
- 2005: "Idealism from Kant to Berkeley", in his 2006: *Kant and the Historical Turn: Philosophy as Critical Interpretation*, Clarendon Press, 67-88.
- Aquila, Richard 1979: "Things in Themselves: Intentionality and Reality in Kant", *Archiv für Geschichte der Philosophie* 61, 293-307.
- 1983: *Representational Mind*, Indiana University Press.
- Ayer, Alfred Jules: 1940: *The Foundations of Empirical Knowledge*, Macmillan.
- Bennett, Jonathan 1966: *Kant's Analytic*, Cambridge University Press.
- Bird, Graham 1962: *Kant's Theory of Knowledge*, Routledge.
- 2006: *The Revolutionary Kant: A Commentary on the Critique of Pure Reason*, Open Court.
- Chiba, Kiyoshi 2012a (KORW 収録記): *Kants Ontologie der räumzeitlichen Wirklichkeit: Versuch einer anti-radialischen Interpretation der Kritik der reinen Vernunft*, Walter de Gruyter.
- 千葉清史 2012b: 「ヘンリー・アリンソンの方法論的・二側面解釈」『日本カント協会(編): 『日本カント研究』三: カントと形而上学』一四九一-六四頁。
- Collins, Arthur 1999: *Possible Experience*, University of California Press.
- Grier, Michelle 2001: *Kant's Doctrine of Transcendental Illusion*, Cambridge University Press.
- Guyer, Paul 1992: "Book Review: Kant's Theory of Freedom", *Journal of Philosophy* 89, 99-110.
- Hanna, Robert 2001: *Kant and the Foundations of Analytic Philosophy*,

- Oxford University Press.
- Langton, Rae 1998: *Kantian Humility: Our Ignorance of Things in Themselves*, Oxford University Press.
- 2001: "Reply to Lorne Falkenstein", *Kantian Review* 5, 64-72.
- 牧野英二 2012: 「物自体・対象・存在」有福孝田／牧野英二(編)『カント学導入のたね』世界思想社、100-117頁。
- Mathews, H. E. 1969: "Strawson on Transcendental Idealism", *Philosophical Quarterly* 19, 204-20.
- McDowell, John 1985: "Values and Secondary Qualities", in Hoderich, Ted (ed.), *Morality and Objectivity*, Routledge, 110-29.
- 中野義道 2004: 『カントの由來』日本評論社
- Onof, Christian 2010: "Thinking the In-itself and Its Relation to Appearances", *Schulung/Verburgt*, 2010, 211-35.
- Paton, H. J. 1936: *Kant's Metaphysics of Experience*, Macmillan.
- Pippin, Robert 1982: *Kant's Theory of Form*, Yale University Press.
- Pogge, Thomas 1991: "Erscheinungen und Dinge an sich", *Zeitschrift für philosophische Forschung* 45, 489-510.
- Prauss, Gerold 1974: *Kant und das Problem der Dinge an sich*, Bouvier Verlag.
- Quarford, M. 2004: *Transcendental Idealism and the Organism*, Almqvist & Wiksell.
- Rescher, Nicholas 1972: "Kant on Noumenal Causality", in his 2000: *Kant and the Reach of Reason*, Cambridge University Press, 21-35.
- 1981: "On the Status of 'Things-in-Themselves' in Kant's Critical Philosophy", in *ibid.*, 5-20.
- Robinson, Hoke 1994: "Two Perspectives on Kant's Appearances and Things in Themselves", *Journal of the History of Philosophy* 32, 411-41.
- Roche, Andrew 2013: "Transcendental Idealism: A Proposal", *Journal of the History of Philosophy* 51, 589-615.
- Rogerson, Kenneth 1999: "Kant's World(s) of Appearances and Things in Themselves", *Southwest Philosophy Review* 15, 1-24.
- Rossetfeld, Tobias 2007: "Dinge an sich und sekundäre Qualitäten", Solzberg, Jürgen (Hg.): *Kant in der Gegenwart*, Walter de Gruyter, 167-209.
- Schulung, Dennis 2010a: "Kant's Idealism: The Current Debate", in *Schulung/Verburgt* 2010, 1-25.
- 2010b: "Imitation and Idealism: Kant's Long Argument from the Categories", in *ibid.*, 159-91.
- Schulung, Dennis/Verburgt, Jacco (eds.) 2010: *Kant's Idealism: New Interpretations of a Controversial Doctrine*, Springer.
- Sellars, Wilfrid. 1968. *Science and Metaphysics: Variations on Kantian Themes*, Routledge.
- Strawson, Peter F. 1966: *The Bounds of Sense: An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, Methuen.
- Turbayne, Colin M. 1955: "Kant's Refutation of Dogmatic Idealism", *Philosophical Quarterly* 5, 225-244.
- Van Cleve, James 1999: *Problems from Kant*, Oxford.
- Walker, Ralph C. S. 2010: "Kant on the Number of Worlds", *British Journal for the History of Philosophy* 18, 821-43.
- Westphal, Kenneth 2001: "Freedom and the Distinction between Phenomena and Noumena: Is Allison's View Methodological, Metaphysical, or Equivocal?", *Journal of Philosophical Research* 26, 593-622.
- Willaschek, Marcus 2001: "Affektion und Kontingenz in Kants transzendentalen Idealismus", Schumacher, Ralph (Hg.): *Idealismus*

als Theorie der Repräsentation?, *mentis*, 211-31.
Wood, Allen 2005: *Kant*, Blackwell.

Zwei-Welten- und Zwei-Aspekte-Interpretation —— Worum handelt es sich eigentlich?——

Kiyoshi CHIBA

Die sogenannte Zwei-Welten- und die Zwei-Aspekte-Interpretation handelt von Kants transzendentalen Idealismus, insbesondere von der Unterscheidung zwischen „Erscheinungen“ und „Dingen an sich“. Diese sind der Zwei-Welten-Interpretation nach zwei distinkte Entitäten, hingegen der Zwei-Aspekte-Interpretation nach zwei Aspekte ein und desselben Dings, das wir empirisch erkennen. Über die letztere werden die „metaphysische“ und die „methodologische“ Variante unterschieden. Heutzutage werden dazu auch noch angebliche „Alternativen“ vorgeschlagen. Dadurch ist die heutige Lage dieser interpretatorischen Debatte noch komplizierter und somit schwer übersehbar geworden. Es ist häufig sogar so, dass in dieser Debatte verloren geht, um welche Probleme es sich in dieser Debatte eigentlich gehandelt hat.

In dieser Abhandlung versuche ich, eine klare Übersicht dieser interpretatorischen Debatte anzubieten. Hierfür rekurriere ich auf die Unterscheidung zwischen der „realistischen“ und der „idealistischen“ Interpretation, die den zentralsten Diskussionspunkt in dieser ganzen Debatte klarstellen und dadurch diese auch für die Kant-Interpretation im Ganzen fruchtbarer machen soll.

In Abschnitt 1 und 2 erläutere ich die Behauptungen der Zwei-Welten-, der metaphysischen und der methodologischen Zwei-Aspekte-Interpretation soweit wie möglich, mit Rücksicht auf den interpretationsgeschichtlichen Hintergrund. Dann versuche ich in Abschnitt 3, mit dem Rekurs auf meine Unterscheidung zwischen der „realistischen“ und der „idealistischen“ Interpretation die verworrene Diskussionslage (inklusive der angeblichen „Alternativen“ zu der obigen drei Optionen) in Ordnung zu bringen. Dadurch wird gezeigt: Die einzigen respektablen Optionen sind im Endeffekt die metaphysischen Zwei-Aspekte-Interpretation (die die einzige aussichtsvolle Option der realistischen Interpretation ist) und die idealistischen Interpretation (deren repräsentative Version die idealistische Zwei-Welten-Interpretation ist); alle anderen „Alternativen“ – inklusive der methodologischen Zwei-Aspekte-Interpretation – stellen sich als aussichtslos heraus. Im letzten Abschnitt gebe ich einen Hinweis darauf, wie die Debatte um die Zwei-Welten- und die Zwei-Aspekte-Interpretation weitergeführt werden sollte.